

卯の花くたし

作・加賀屋
淳

【時】

2076年5月の午後。

【ところ】

秋田市・大町 川反中央ビル一階 ココラボラトリ。
この作品の上演会場も同じココラボラトリ。

【登場人物】

小川正隆	会社員	演・加賀屋淳
榊原禄郎	美大准教授	演・山田賢一
山口メイ子	現代美術作家	演・佐藤らん子
佐藤麻由子	椅子女。実は、つまみ細工作家	演・なみぎしちか

開場中。

寂し気な雨音である。

寂し気な雨音が続いている。

秋田市の中心地・大町にあるギャラリースペース・コラボラトリー。

部屋の真ん中には小さな椅子(通称・とうふイス)が4つほど雑然と置かれている。そのうちの1つに五弁の花をモチーフにしたかぶり物をかぶった女が一人座ってなにやら手芸のような手作業をしている。女はかぶり物以外はごくごく普通の服装をしている。

女は小さく何かをずっとつぶやきながら手を動かしている。

椅子に座った女

しとしとしと…しゃばしゃばしゃば…さらさらさら……

その周囲には塗装用のローラーやペンキのトレイなどが散らばっている。すべてよく使いこなされている。

定刻。

いちいち書くのが面倒なので、“椅子に座っている女”・“椅子に座っている女”は、このあと本名が発覚するまで“椅子女”としよう。

コラボラトリー入口の金属ドアが開閉する音。

入口からの女の声　どうも……。

椅子女　はい。

入口からの女の声　誰かいませんか……？。

椅子女　いないよー。

ト、入り口から眼鏡をかけた女が一人入ってくる。長めの髪に黒のシックなトップスと黒の長めのスカートに身を包んでいる。片手に大きめのキャンバストートバッグ。一見して異質な雰囲気漂っている。

女は山口メイ子という。

誰かを探している風の山口。それにもかかわらず椅子女は黙々と手作業を続けている。

山口、ギャラリースペースを見回す。足許に転がるペイントローラーをふと見つけ、おもむろにそれを手にする。

満面の笑みの山口。縦横無尽に色を塗るように空にローラーを走らせる。

その様は無邪気そのもの。

突然何が始まったのか、といった『は？』な視線で山口を凝視する椅子女。

山口　（満面の笑みで）フッフ、ハハハ、ハハハハ…。

ト、突然なにかにビクッと反応。

メガネのフレームをダブルタップして、目の空をタイピングするようにタップする。

山口　なんだよー。

苛立ったため息をつき、出口から出ていこうとするがふと振り返り椅子女の方を見て、

山口
ヒーツツツ!!

ト、椅子女にじりじりと近づきじつと見つめる。さらに椅子女の周りをまわって360度からじつと見つめてみる。椅子女の頭の上で恐る恐る手を動かしたりする。
ちよつと離れて、

山口
…なにこれ? 浮いてる…。…どういう仕掛け? (限りなく顔を近づけて)…うわっ、気持ち悪っ!!

山口、飛び出していく。

椅子女
やかましいわ、不審者めが!! ったく!!

しばし静寂。

ト、再びココラボラトリーの金属ドアが開く音。

二人の男が賑やかに会話しながら部屋に入ってくる。

一人の男は小川正隆という。もう一人は榊原禄郎という。

小川の服装は礼服。ネクタイは黒。片手に小さな紙バッグ。もう片方にはセカンドバッグ。小川は会話の途中、時折、胃をおさえるしぐさを見せる。

一方、彼よりもやや若い男が榊原。彼は使い捨ての化学防護服を着て登場。

小川 榊原先生、なかなかシユールでしたよ。神社の前に腰かける全身防護服姿の男。
榊原 ハハハ。休憩にはちょうどいい場所だもんでね。(軽く匂って)ん…？

ト、榊原、匂いの記憶をたどり軽く思案する風。

小川 あ、榊原先生が書かれた『仮住まいの世』の三枚組の絵、会社にちゃんと飾らせてもらってます！
榊原 ああ…。すみません、あんな落書き買わせちゃって…。ほんと、申し訳ない。

ト、深々と頭を下げる。

小川 いや、素晴らしい作品だったから買わせていただいたんです。
榊原 いやいや、恥ずかしい。

小川 私、先生の作風好きなんですよ、美術、美術してなくて…、
榊原 それ、ほめてます？
小川 もちろんです！

榊原 小川社長のその言葉、素直に受け止めます。どうも。(頭をペコリと下げる)

小川 いやいや、私、社長じゃないんです。いつも事務所でこんな雰囲気漂わせているものですからよく言われるんですけど、ただの社員です。

榊原 いくらなんでも『ただの社員』ってわけないでしょ。

小川 いや、ほんとの平社員です。

榊原 じゃあ社長は？

小川 私の伯父貴の会社なんです小川建築工房は。先生が来られた日は出張中の伯父貴の代理で対応させていただきました。

榊原 ふーん。

小川 …でも、もし私なら、もっと大きい絵買ってたのになあ。

榊原 実はオレ、大きい絵描けないんですよ。手慰み程度に(手で大きさを表して)このくらいのちっちゃいやつチマチマツと書くのが好きで。

小川 へえ。

榊原 まあ、絵って言っても舞台の正面図だとか平面図の延長線上にあるマンガ図みたいなもので。逆に大きいの描くとボロが出るんですよ。

小川 またまたあ。

榊原 いや、ホント。買ってくれるっていうから無理やり値段付けたくらいなんです。

小川 でもあの絵、安過ぎです。私だったらあの値段の倍は出すけどなあ。

榊原 そこ。だからこそ社長は堅実な会社経営ができてるんだと思うんですよ。

小川 ということですか？

榊原 『榊原の絵なんて投資の対象にすらならない。そのあたりの壁にチョコンと飾っておくぐらいがちょうどいい。そのレベルであれば出せる金はこのくらいだ』って社長は直感的に判断できてる。

小川 そうですかねえ。

榊原 うん。そういう意味で社長は経営感覚だけじゃなく審美眼も優れてると思うんですよ。

小川 どうかなあ。

榊原 そういうアートとカネのバランス感覚にシビアであることってアートマネージメントの世界じゃイロハのイですからね。

小川 はあ…。

榊原 あ、小川さんのこと責めてるわけじゃないからね。そういう感覚も経営には必要だっていう、まあ、一般論と

してね。

…

間。

榊原 もともとオレの専門って舞台芸術とアートマネジメントなんですけど、

小川 ええ。

美大に来た年、お披露目みたいな感じで新任教員たちがこれまでの仕事で制作した作品集めて展示やるから、
って言われて、あわてて昔手掛けた舞台作品の模型だとか、図面引っ張り出してきて展示してもらいました
ね。

小川 私もその展示見て先生のこと知ったんです。

榊原 あー、そうだったんですか。

小川 我々もお客様との打ち合わせで家の完成予想図をお渡しするんですけど、なかなかそのイメージを伝えるのが
大変で。

榊原 うんうん。

小川 先生の書かれた舞台装置の絵ってものすごく臨場感があるというか、世界観が伝わってきて、見ているだけで
ワクワクしてきたんです。

榊原 それが舞台をプロデュースする人間の一番の仕事でもあるんですよ。

小川 というと。

榊原 演劇とかショーとか大きい装置組むような舞台はスタッフとか出演者に早いうちに作品の世界観を共有して
もらわなきゃなんない。だから理解してもらいやすいように舞台模型作ったり舞台図を描く。

小川 ええ、そうですね。

榊原 もともとこの手の図面って身内向けの内部資料でしょ。表に出すもんじゃない。

小川 そうですね。なんか、特別な世界の裏側をそつと見せてもらったような感覚がありました。

榊原 そこがウケたんでしょうね。それからやたらと舞台装置図風の絵描く仕事もらっちゃって。面白いもんですな。

小川 秋田に來られたのはどういふきっかけで。

榊原 ああ、美大に舞台芸術学科が出來て三年経った年に菅沢さんから教員やらないかって誘われましてね。

小川 あ、菅沢教授？ 舞台俳優出身の。

榊原 そう。オレ、若い頃からガサさんが出てる舞台に裏方で参加してて。

小川 ガサさん？

榊原 我々仲間内じゃ彼のこと、〃ガサさん、ガサさん〃って呼んでるんですよ。 ス〃ガサ〃ワだから。

小川 っていうか、あの人ガサツだから、ガサツのガサさんっていうのがあだ名の由來みたいだけど。

小川 ずいぶん長いお付き合いなんですか。

榊原 まあ、舞台の作法、社会の礼儀、業界の義理人情、いいこともちよつと悪いこともいろいろ教えてもらったわけですよ。オレにとつちや兄貴みたいな存在でね。

小川 へえ。

榊原 自分の受け持つてる学科の中をもうちよつと充実させたいから、力貸してくんねえかって言われてね。

小川 それで、教職の表舞台に。

榊原 教職なんて表舞台じゃないですよ。学生の人生のための裏方が影の黒幕みたいなもんですよ。未來を背負う人間に希望を託す手伝いをするんです。あくまで我々の役目は。…ちよつとカッコつけすぎたかな、ハハハ。

小川 いやいや。

ト、榊原と小川、同時に椅子に腰かけ、

小川・榊原 どっこいしょつと。はあーっ…。

二人、顔を見合わせ、笑う。

小川、壁から天井、床と、ギャラリースペース全体をぐるっと見まわす。

小川、椅子女に気づき会釈。会釈を返す椅子女。

小川、椅子女をじっと見つめ、

小川
…マチ？

椅子女
ん？

小川
あ、すみません。人違いでした。

榊原
（小川に）はい？

榊原、小川の視線の先に気づく。椅子女の方を振り向き、

榊原
あー！ こんなところに置いてたら汚れるじゃねーかよ。

ト、椅子女のかぶり物をスポンと取り、

椅子女
あ。

小川
ちよつちよつちよつ！

榊原
大事なもんなんだからもっと丁寧に扱えつつんだよ…。

ト、かぶり物を思いつきり乱雑に扱いながら、スタッフルームの方に持っていく榊原。

小川
（榊原に）先生、ちよつと!!（椅子女に）大丈夫、ですか？

椅子女 (まあまあ、気にしないで、という風に対応し小川の下手側椅子に移動する。)

小川 言ってることとやってること真逆じゃないですか。自分がガサツなんじゃないの。

椅子女 慣れっこだから。

小川 (椅子女を見て) …あの、すみません。…もしかして、マチの親戚の方とかじゃ。

椅子女 え。

小川 ああ、いや、人違いですね。最近視力も悪くなってきた…、

椅子女 でも見えるんですよ、私のこと。

小川 はい、ちゃんと。

椅子女 ほう…。(ト、やけに納得。)

戻ってくる榊原。小川の周辺を凝視し首をかしげる。

榊原 あれ？ 台、寄せました？

小川 台？

榊原 (自分の頭のあたりで、手を使ってかぶり物の形を再現し) あれの。

小川 なんのことですか。

榊原 かぶり物が乗っかってた台。

小川 いや、台に乗ってたとかじゃなくて、この方がかぶってたのを…、

椅子女、この二人のやりとりの間に手作業をしながら、そそくさと旭川側のバックヤードにハ
ケている。

小川 あれ？ どこいった？

榊原 どこいったんだろ。小川さんが寄せたんじゃないんですか？

小川 人のことを「寄せた」なんて言っちゃ失礼ですよ。

榊原 (気おされて、) ああ…すみません。いや、私と小川さんしかいないから、展示台片付けてくれたのでつきり小川さんかと思つて。

小川 はい？

榊原 え。

小川 いまいた方がかぶつてたの先生が脱がして持っていったから。

榊原 …は？

あたりを見回す榊原。

榊原 誰が？

小川 (周りを見回し)…えつとお…、

榊原 …なになに、気持ち悪いなあ。…小川さん、ちょっとビビらせないでよお。

小川 そんなじゃないです。

榊原 ま、いいか。気分変えて、作業再開、再開い。

小川 今日はなにか？

榊原 このギャラリーの壁と床の補修とペンキ塗り。

小川 ペンキ塗り？

榊原 明後日、「モリ森尾」の作品搬入があるもんで。

小川 え、あの炎上系アーティストのモリ!?

榊原 あー、今はすっかりそれで有名になっちゃいましたね。オレのダチなんですよ、あいつは。
小川 うわあ、モリさんとお友達なんですネ。スゴイ!

榊原

モリ「さん」って。ハハ。年が違っただけで同じ大学の出身で腐れ縁のダチで。あいつなんてただのキワモノ製造機ですよ。この間この下見に来てたんですけどここに入ってくるなり、「あちやー、壁の汚れが気になるなあ、この床の剥がれもうちょっとどうにかならんか」ってごちやごちや言い出して。

小川

いかにも芸術家ですね。

榊原

ワガママなだけです。で、そのこと橋本に話したら(橋本の口調で)「はい。じゃ、やりますか。」って。

小川

ハハハ、似てる似てる！

榊原

いくら橋本がコラボのオーナーで管理人だからって言っても、ヤツだけにやらせるのは気の毒だし、ここに森尾を紹介したオレの責任もあるもんで、手伝いに来たんです。

小川

なるほど、それでその恰好なんですね。(入り口方向に目を遣り)でもペンキ乾きますかね、この天気で。

雨の音。

榊原

大丈夫、…でしょ。…ってか、橋本どこまで行ったんだよ？

ト、榊原立ち上がり、床に転がっている塗装用品を物色し始める

榊原

ちよつと飲み物買ってくるって言って飛び出してかれこれ三時間だよ。

小川

私もここ来る前、橋本君に連絡してからと思ってLINEしたんですが、既読もつかないし電話しても全然連絡付かなくて。

榊原

あれでよくこのオーナー務まってるよなあ。

小川

うーん。後藤さん、石田さん、大場さんって三世代の偉大なコラボオーナーの時代見てるから橋本君のあのマイペースっぷりはねえ…。

榊原

一昨年、金沢に行っちゃった大場君は社交的でフットワーク軽くて仕事も早かったから、なおさら橋本の個性

がマイナス方向に際立ちちゃってんだよなあ。

小川 オーナー歴三年目のわりに橋本君ちよつとねえ…

榊原 ヤツも、雑なんだよな。世の中雑な奴ばっかだよ。

小川 いやまあ…。

榊原 オレが秋田の美大で関わった学生の中で群抜いて橋本が一番雑のバカツツだよ。

小川 バカツツ…？

榊原 …？ あ、遠州弁で「バカ野郎」のこと。

小川 そこまで言わなくても。

榊原 言わなきゃわかんないんですよヤツは。ま、言ってもわかんねーけど。…うーん、作品作る体力も精神力もセンスもあるんだけどな。

ト、頭を搔く榊原。

小川 あの…、遠州弁って、静岡の？

榊原 ええ。静岡でも大井川から西の地区の言葉ですけどね。

小川 秋田ご出身じゃなかったんですか、先生？

榊原 高校卒業までは秋田市。で、大学からはずっと浜松。8年前に縁あって秋田公立美大に。

小川 8年前って言うと…2008年？

榊原 ええ。

小川 …浜松っていうと…大丈夫でしたか、7年前の震災？

榊原 ああ…、あの時はすっかり秋田で生活してましたから。

小川 御親族は？

榊原 向こうには親族いないんで。

このやり取りの合間に、椅子女は廊下から出てきて二人の間を手刀を切りながらすり抜けるように通過し、

小川 (椅子女に) あ、ごめんなさい。

椅子女 どうもー。(と、出口の方へ行く。)

榊原 はい？

小川 え？

榊原 何か？

小川 何か？

榊原 今「ごめんなさい」って。

小川 言いましたっけ？

榊原 言いました。

榊原、なんとなく作業の準備をし始める。

小川を見て、

榊原 (ぼそっと) 礼服かあ…。

小川、ふと考えて、

小川 ああ！ あのかた…、

ト、小川は椅子女を指差ししかるが、椅子女は口に指を当てて“シート”のポーズ。

小川 え!?

榊原 はい?

椅子女 あ、私のことは見えないことにして話進めてくださいな。

小川 はあ…。…えっと…、あ、浜松のお住まいは?

榊原 もう完全に引き払ってきました。住んでたマンションもつぶれちゃったんで。

小川 うわー、お気の毒でした。

榊原 津波も被災想定はるかに超えて浜松駅の2キロほど手前まで来たくらいで、もう海側の地域は壊滅的でしたからね。まあ、7年経ったっていつてもあつちはしばらく文化だの芸術だのより復興最優先ですよ。

小川 …すみません余計なこと訊いちちゃって。

榊原 小川さんが、謝ることじゃないですよ。日本の大動脈とはいえ、自然災害の前には人間はかなわなかったってことです。

…。

小川 へんな空気になっちゃったね。

榊原 いやいや、私が話振ったから。…浜松でもやはり大学の教員を?

小川 いや、浜松市内中心に劇場とか音楽ホールで舞台制作とかマネージメントの仕事を。浜松って音楽産業が盛んな土地で、音楽の公演も結構多いんですよ。あと、呼ばればガサさんの舞台だけじゃなく東京だの関東の仕事もこなしてました。

小川 へえ…。

ト、小川、来ている礼服を軽く整える。

榊原、それを見て、

榊原 小川さん、さつき外で、後藤さんの法事に参加してきた、って言っていましたよね。
はい。

榊原 後藤さんとは面識あったんですか？

小川 高校生の頃いろいろと相談に乗ってもらってましてね。

榊原 オレもです。大学受験の時いろいろと相談に乗ってもらって。石田さんにオーナーをバトンタッチしてからはあまりここに来てなかったみたいですけど、晩年は石田さんのサポートでちよくちよく顔出してたみたいですよ。…どうでした？ 法事。

小川 ああ、お客様たくさんでにぎやかでしたよ。でも、今回の二十七回忌で後藤さんの法事に一区切りつけることにしたんだそうです。御親族がおっしゃってました。

榊原 …弔い上げることかあ。…って言うことはこの先、後藤さんの法事はしないってこと、ですよ。
小川 そういうことになりますね。

榊原 後藤さんの顔を知っている人間がまだいるうちは法事してあげてもいいと思うんだけどな。毎年やるわけじゃないんだし。

小川 私もそう思うんですけど。でも二十七回忌までちゃんとやったっていうのはほんと、丁寧なことですよ。

榊原 あー、遠慮しないでオレも行きやあよかったな、法事。

小川 そうですよ。私みたいな一般人ですら参列させてもらったんですから。

榊原 うちの古株の教員も何人か行っていましたね。

小川 ええ。あとは有名な美術作家さん、地元の作家、後藤さんにお世話になったっていう美大の卒業生。卒業生って言っても私くらいの年恰好でしたけどね。

榊原 もう今の若い連中には「後藤仁」って言ってもピンとくるやつらなんていないだろうしな。

小川 あの当時あれだけ秋田のアートシーンで活躍した人なのにね。

榊原 寂しいね。

小川 寂しいですね。

ト、入口のドアが開く音。

榊原 あ、橋本やっと来やがった！

ガラガラ。

榊原 このバカッつーがっつ！！

ト、山口がすつとギャラリースペースに入ってくる。それに続いて椅子女が例のかぶり物をかぶって入ってくる。

反応する小川と榊原。

山口 誰がバカよ。…あー、雨やだあ…。

榊原 ああっ！メイさん！？

山口 大バカのバラさんもいたんだ。（軽く首だけで会釈し）どもー。

椅子女 この人挨拶雑だねえ。（山口を匂って、）ああ、この人すつごいイイ匂い！！（もう一度匂って、）カボティースのローズじゃん。

小川、椅子女を制する。が、榊原も山口も椅子女に動じることはない。

榊原 ごめん、てっきりバカが戻ってきたかと思って。

山口 それってあたしがバカって事かしら？ っていうかさつきあたし来てたのわかってたんなら声かけてよ。

榊原 やっぱり来てたんだ！

山口 やっぱり、って？

榊原 メイさんのイイ匂いしてたから。

山口 うわっ、言い方ヤラシイッ！！

榊原 あ、すまん。あ、いや、そんなことよりメイさん、どうして秋田に？

山口 打合せ。橋本ミシュさんって人に会いに。いる？

榊原 いるにはいるんだけど、いないんだわ。

山口 どっちよ？ いるの？ いないの？

榊原 いつもはいるんだけど、今は、いないっていうか。

山口 どこにいるの？

榊原 いや、こつちも探してるとこなんだわ。

山口 えー？ この時間に打合せさせてほしいって橋本さんから連絡もらったから前の予定切り上げてわざわざ来たんだけど。

榊原 何のために？

山口 今年の冬に秋田でやるアートシンポジウムのゲストスピーカーに呼ばれてんの。そのシンポジウムの窓口とコーナーディネーターが橋本さんなのよ。

榊原 そのために？

山口 うん。だって冬までスケジュールびっちりだもの。あと、シンポジウム用に借りてた資料も返しに来た。

榊原 確か、メイさんいま住んでるところって…、

山口 ビッグアポー。

榊原 だよなー。

小川 ビッグアポーって？

榊原 (がっくりと) ニューヨークだよ。

小川
えーっ。

ちなみに椅子女は上手側の椅子に腰かけ、手作業をしている。

榊原
マジか!?

山口
マジだ。打合せ終わったらとんぼ返りだ。

榊原
(つぶやく)橋本バカツッー…ペンキ塗るどころの話じゃねーだろよ!?

小川
(榊原に)先生、この人、誰?

榊原
メイさん、ごめん!! オレ、橋本探してくるわ。首根っこひっつかまえて連れてくる。

小川
(榊原に)ちよっ、ちよっ!! この人誰なんですか?

ト、榊原、ココラボを飛び出していこうとするが、椅子女のかぶり物に気づき足を止める。

榊原
…グハッ!!…んんつつっ!?

その声に反応する山口と小川。

山口の視線は椅子女のかぶり物に。

山口
うわっ!! またよ!! なんで中空に浮いてるのよ、これ? もうーっ、気持ち悪いつたらないわよー!!

榊原と山口、椅子女の頭部、というかかぶり物を凝視しつつも微妙な距離をとりながら椅子女の周りをじりじりと2〜3周回る。

山口 糸かなんかで吊ってるの？

榊原 いや、浮いてるみたいだね。

山口 超電導？

榊原 日本の文化遺産みたいなこのビルで、そんな電力使ったらこのブレーカー落ちるぜ。

小川 ……これ、どういうシチュエーション？

山口 じゃあなんで浮いてるのよ、これ？ まさかの…オカルト案件？

榊原 ……恐怖をこらえて声を絞り出しながら）かぶり物の呪い。

椅子女 失っ礼な!!

小川 かぶり物かぶって座ってるだけでなんでこんな大事になってるの!?

山口 ……なんでそんな物騒なものここにあるの？

榊原 ……これ、コロボのオーナーが代々大事に保管してきたものらしくてさ、

山口 ……花のかたち、だよね。

榊原 ……五弁の花、かな。

椅子女 そうだよ。きれいでしょ。

山口 ……(ゴクッ)なんか秘密結社の紋章とか。

椅子女 違うってば。

榊原 ……そういえば、オーナーの代替わりの際このかぶり物のことで必ずつこう引継ぎされるんだって。

山口 ……(ゴクッ)。

榊原 ……「このかぶり物は、大事に保管すること…。」

山口 キヤーツ!!

榊原、小川、椅子女、激しく驚く。

椅子女 ビックリしたあ！もっかい死ぬかと思った！

山口 で？

榊原 それだけ。

山口 それだけって…。

榊原 50年くらい前ここに出入りしていた人がなんかの目的で作ったものらしいんだけど、詳しい事はわかんないんだよ。ただ、(ト、またスポンとかぶり物を取り、その内側を見て)ここに「サトウ」って刺繍されてて、ちよつとバラさん、あなた躊躇なく手に取ったね。

山口 あ。

榊原 なんか起こるよ。

椅子女、転がっている刷毛を手に取り、誰にも気づかれないように榊原の顔をなでる。

榊原 うわーーーーっ！

山口 うるさいわよ。(内側をのぞき込んで)…あ、ホントだ。 “サトウ”…。の、ごはん？…。

榊原 (真顔で)…え。

山口 …。

榊原 …。

山口 時には冗談も言うよ、私。

榊原 すごい謎解きが隠されてるかと思った。

山口 これ、誰の名前？

榊原 作家さんだったら何か記録に残ってるはずだろうからって、橋本がこのオープン当初までさかのぼって調べただけどそれらしい情報は出てこなかった。

山口 だとすると忘れもの、とか。

榊原 多分そんなところ。持ち主が現れるまでは大切に保管しとけっていうことなんだろうと。

山口 謎解決。

小川 オカルト案件は…、

椅子女 蒸し返さなくていいんじゃない、この件は。

椅子女ものぞき込み、につこりとほほ笑む。

榊原 あ、そんなことより、ちょっと橋本探してくるわ。

ト、飛び出していく榊原。

かぶり物はほっぼらかし。

小川と山口、残される。

二人、同時に深いため息、一つ。

微妙な間。

山口、かぶり物を手に取り、中をのぞく。

山口 結構丁寧に作ってるんだ。

かぶり物を軽く匂い、

山口 ん？

顔を上げ、ちょっと思索するような視線を中空に向ける。
おもむろにざっくりとかぶってみる。

椅子に腰かけそつと目を閉じる。

しばらく目を閉じているがふと目を開き、

山口
なるほど。

ト、かぶり物を脱ぐ。それを自然に椅子女が受け取り丁寧に装着。かぶったかぶり物に手を当て目を閉じる。まるで何かを読み取るように。ふたたび目を開け、なるべく「人間」の視線に触れにくい場所、壁に近い位置の椅子に腰かけて作業を再開する。

山口、冒頭と同じように懐かしそうに部屋を見回す。

山口
（部屋を眺めまわして）まんまだ。
小川
はい!?

山口、不意に立ち上がり背後の壁に近づき壁のあちこちを触りながらつぶさに壁の何かを探している。

山口
あつ！ あった!!

山口、振り返り、今度は床をチェックし始める。その顔は宝物探しか干潟で貝を探している少女のような無邪気な表情である。

山口
これだあ！

再びほかの何かを探そうとする山口。再び壁を調べ始める。

山口 あった！ ほら！ ここ!! (小川を手まねきし) ほら、ここにペンキ厚くなってるところあるでしょ？

小川 (壁に近づき山口が示した一点を凝視し、) ええ、ありますね。

山口 ね！ これ、あたし塗ったところ。ペンキなんて塗ったことなかったからさ、とりあえず白く塗っちゃえ！ つて感じで。そしたらね、あたしに見かねたんだろうね、後藤老人がこうやって、

ト、言うや否や床のローラーを小川に握らせ、

壁に色を塗るジェスチャーを手取り足取り、指図する。

そして山口は小川の背後に回り、小川のローラーを握った手を支えてローラーを動かして、

山口 「こうやるのよ。あんまり急いで何度もごちゃごちゃ動かすとペンキが泡立って塗った表面がでこぼこになるから」 って。

小川 後藤さんって、後藤仁、さん？

山口 そう！ あなた、知ってるの？

小川 ええ。昔いろいろお世話になったものだから。

山口 え!? なになに？ ホント？

山口、完全に小川との距離がとにかく近い。

小川 ええ…。

山口 ね、ね、ね、どんな人だった、後藤老人？

小川 ……どんなって、高校三年の時に初めて会って。で…

山口

そうなんだ。あたしも高校生の頃に初めて会ったんだよね、後藤老人に。パパの実家に遊びに来たとき、一人でぶらっとこのあたり散歩してたの。そしたらね、そこ（入口）のドアが開いてて。ここが何やってるところかわかんなかったんだけど、「入っていいよ」って言われた感じがしたのよ。

小川

誰に？

山口

ドアに。って言うかこの部屋から聞こえてきたのよ。

小川

「入っていいよ」？

山口

入ったらね、おじさんたちがペンキまみれになって壁とか床とかコロコロやってたの。それ見てたらいつの間にかあたしもコロコロ手伝ってた。

小川

…へえ。すごい積極的ですね。

山口

最初は全然うまく塗れなかったんだけど後藤老人が塗り方教えてくれるとね、どんどんキレイに塗れるようになっていくの。うれしかった…。

小川

…はあ。

山口

ちよっとくたびれた感じの部屋が、この白いペンキをちよっと塗るだけで劇的に変わっていくのね。…なんていうのかな、曇った空の隙間から光が差ししてくるって言うことあるじゃない？ あんな感じ！ 塗れば塗るほどそれがどんどん広がっていった。その時こう思ったの。自分の能力で空間を作り上げていくのってすごいことなんじゃないかって思ったのね、その時。

椅子女

わかるわあ、その感じ。

小川

…へえ。

山口

あたしインスタレーションにすごく興味持つようになって、仙台から女子美に入って立体アート専攻したのね。…へえ。

山口

もう毎日が楽しくて楽しくて。葉っぱ見ても、石ころ見ても、アクセサリー見ても、人見ても、ビル見ても、何見ても楽しくて楽しくて、この世界全部があたしの作品の素材なんだ、って思えてきたの。

小川

スケールが大きいですね。…美術、やってらっしゃるんですか。

山口
アートは楽しいよー。頭ひねればひねっただけ、手を動かせば動かしただけしっかり形になっていくからね。動かさないとだめ。絶対だめ。よくさ、

「生みの苦しみ」なんていう人いるじゃん。あれってあたしの中では絶体存在しない概念なのよ。あたしに言わせたらそう言う時は迷わず「案ずるより産むが易し」じゃんって思うわけ。

小川
ハハハ…。でもインスタレーションって空間設計だから、儲かるなんて次元のものじゃないでしょ。

山口
全然もうからない。インスタレーションなんて大量生産できるものじゃないし、あたしがどんなに好きでもインスタレーションできるスペースがなきゃ作れないし。だから普段はアクセサリーとかオブジェつくってるの。

椅子女
（山口をじつと見つめて）へえ、この人シックな見た目と違ってこんなキラキラしてかわいいアクセサリー作るんだあ。わたし好きかも。

小川
はい？

山口
作品作ったらあたしのマネージメントしてくれてるギャラリーですぐに売ってくれるしね。

椅子女
私は趣味の延長線上でやってたから全部自分でやらなきゃなんなかったの。大変だった…。

小川
：

山口
あたしの名前を背負った作品が日本だけじゃなく世界に広がっていくのよ。この地球上にあたしの作品がインスタレーションされていくのよ。めっちゃくちゃ、いいよね。…あー、しゃべり疲れちゃった。のどかわいたな。…こここの二階、カフェだったよね？ ちょっとお茶してこよっと。

ト、ギャラリーから出ていく山口。

小川
圧倒されました。情熱的というか、押しが強いというか。

椅子女
うーん、すごいよね、山口さん。

小川
山口さんって言うんですか？

椅子女 (かぶり物に手を当てながら山口の残した想念を読み取る、というかなんというか……うん。…山口メイ子、

っていうんだって。すごい有名な美術作家みたいよ。

小川 面識あるんですか？

椅子女 ううん、これ(かぶり物)が教えてくれた。

小川 またまたあ、本当ですかあ？

椅子女 ほんとほんと。さっきこれかぶってくれたじゃない、彼女。でもさ、ああいう人のこと天才って言うんだろ
うね…。

小川 天才かあ…。うらやましいですね。

椅子女 あんななってみたかったな。

小川 同じく、です。私、高校生の頃から美術が好きで、現代美術の作家になりたかったんですよ。

椅子女 へえ、意外。そんなふうに見えなかった。

小川 ですよ。いや、現代美術作家っていう響きにあこがれてたって言ったほうがあつてるかな。

椅子女 うん。

小川 何やつてもダメな男でね、私。勉強ロクにできもしないくせに努力もしない、しかも絵も造形物もヘタクソで。
夢はかなわなかったけど、今でもコラボやここに関わる人を心底応援してるつもりです。

椅子女 私ね、後藤さんと同世代なのよ。私もよくここに来て、お仕事の話したり、他愛もない話したりしてたわ。
あの頃一番楽しかった。

小川 え？

椅子女 私も一度だけここで作品展やったのよ。これの。

ト、手作業で作っていた作品を見せる。

が、その手元には何もない。何もない手元を見ながら椅子女と小川は話に花を咲かせる。

小川 これは。

椅子女 つまみ細工っていうの。江戸時代くらいからある伝統工芸なの。

小川 へえ、キレイなもんですね。

椅子女 でしょ。(ト、手作業を続ける)

小川 あ。(かぶり物を指差して)これってもしかして、(今度は作品を指差して)これ？

椅子女 そ！つまみ細工の妖精ですっ♡

小川 …あ、はい。

椅子女 そういう反応になるよねー。イタイお姉さんだよー。でもね…、根っから好きなのよ、こういうの！

ふと、小川、椅子女をじっと見つめる。

小川 趣味でやってらっしゃるんですか？

椅子女 かぶり物？

小川 じゃなくて、つまみ細工。

椅子女 ああ、いちおう、仕事で。

小川 作家さんだったんですか。

椅子女 就職した頃に友達から誘われてつまみ細工始めたの。あんまり体も丈夫じゃなかったから体育会系の趣味苦手だね。

小川 ふーん、そう見えないけどな。

椅子女 こう見えて実はか弱いだよ。

小川 フフ。

椅子女 なにがおかしい！

小川 いや、なにも…。

椅子女 意外とはまっちゃったのよね、つまみ細工つくるの。作品も増えてきて楽しくなってきたころ、会社の同僚と結婚することになって会社辞めちゃったの。

小川 そうだったんですか。

椅子女 でも細工づくりだけはやめなかった。大親友の子が結婚式を挙げた時にも髪飾り用にプレゼントしたりしてね。そしたらね、その子だけじゃなくその髪飾り見た結婚式のお客さんも口々につまみ細工の髪飾りほめてくれて。誰が作ったのかもわからない作品をよ、ただただ好きで作ってたものをこんなにほめてもらえるなんて思いもよらなくてさ。

小川 続けるって大切なことですよ。いつか認められる日がきつと待ってるから。

椅子女 そうなのかしらね。

小川 そうですよ。

椅子女 で、そのあと再就職とかパート勤めも考えたんだけど、つまみ細工作家ってのもいいかなって思ってたの道に。

小川 順調でしたか？

椅子女 いやいやいや。そんな甘くない。それこそ、ここで作品展やったときにたまたまふらっと立ち寄ったお客さんからこんなこと言われちゃってさ。

小川 どんなことを？

椅子女 聞く？

小川 …あ、やめよつかな。

椅子女 話します。「趣味でこんな作品作れるなんてすてきだわ。プロになったらいいのに。」って。
小川 …。

椅子女 趣味って言われちゃったよお…って。きつかったあ。

小川 落ち込みました？

椅子女 ショックだったけど、もしそこで落ち込んだらあとは趣味の人に戻るしかないでしょ、だって自分で

これを仕事にするって決めたんだもん。これで生きていくんだって決めてたんだもん。自分を磨いて磨いて前に進むしかないじゃない。いまはもう、悟りの境地にたどり着いたわよ、ハハハ。

小川　なんか神々しく見えてきました!! ちよつと手、合わせてもらっていいですか?(ト、冗談交じりに椅子女へ合掌する。)

椅子女　ああ、そんなことされると気持ちが悪く着くう。

小川　へんなこと聞いていいですか?

椅子女　なに?

小川　山口さんも榊原先生もあなた…、あ、名前。私、小川正隆っていいです。お名前うかがってもいいですか?

椅子女　麻由子、(かぶり物を取って、内側に書かれた名前を指して)サトウ。佐藤麻由子。

小川　ああ、サトウさん! そうでしたね。

椅子女　お餅屋さんじゃなくてごめんね。

小川　ハハハ。

椅子女　つまみ細工のマユ、略して…、ま、そこまではいいか。マユでいいよ。

椅子女は佐藤麻由子というらしい。

小川　マユさん。…なんで山口さんも榊原先生もマユさんのことあからさまに無視するんでしょう。かぶり物のことはいじり倒してるくせに。

麻由子　見えてないんじゃない、私のこと。

小川　はい?

麻由子　見えてないんだよ。

小川　見えてないって、そんなことありますか?

麻由子　うん、おそらくあなた…、

入り口のドアの音が聞こえる。

小川 あ、橋本君？

榊原、戻ってくる。

小川 違った。

榊原 ちがうって？

小川 橋本君かと。

榊原 ああ…、（軽く匂って）あれ、メイさんは？

小川 2階のカフェに行かれました。

麻由子、かぶり物を脱ぎ椅子に置く。そして榊原と小川の間に立ち、会話のあいだ中、榊原に向かって妙な動きをしてみせる。

榊原と小川は面と向かって会話している。

榊原は普通通り会話しているが、小川はなんだか話しづらそうである。

榊原 そうか。

小川 橋本君みつけました？

榊原 やつと連絡取れた。取れたっていうか、電話つながっただけなんだけど。

小川 どこにいたんですか？

榊原 それがわかんないんですよ。

麻由子 (小川に)ね。

小川 (麻由子に)全然見えてないんだ。

榊原 そ、居場所が全く見えん。この辺であいつがいそうなところは回ったんだけど、

麻由子 すごく近くに居るから大丈夫よー。

小川 (麻由子に)ホント？

榊原 ホントです。あいつのいそうなところ、いそうなところ…

小川 (榊原に)じゃなくて、近く…、

麻由子 シッ！もう少し黙ってようよ、おもしろそうだから。

小川 (麻由子に)声も聞こえてないの？

榊原 聞こえてないっていうか、聞いてないっていうか。通話つながったかと思ったら『ふあい……グ……』って。あいつどこかで居眠りぶっこいてんだ。もういっぺん探してきます。メイさん戻ってきたらちよつと待っててもらって。

ト、再び飛び出していく榊原。

椅子に腰かける小川と麻由子。

わずかの静寂。

小川 ……見えてないってどういうことなんですか。

麻由子 住む世界が違うから見えないのよ。

小川 住む世界が違う。

麻由子 そう。裏を返せば、お互いが見えてるあなたと私は同じ、というか近い世界に住んでるっていうことなのか
もしれないわよ、ハハハ。

間。

小川 ……実は私、子供の頃から敏感な方でしてね、こういうの。

麻由子 おっ！ そうなの？ なんかうれしいわあ。

小川 性格なんだと思うんです、相手にされてないっていうか、無視されてるっていうか。

麻由子 ああ、そっちのほうね！ なるほど、なるほど。 ……うーん、いいんじゃない、楽で。気遣われなくて。

小川 いや、そういうんじゃないで、なんていうか、意識的に無視されているっていうか。

麻由子 それは思い込み過ぎ。あなた、（小川を見て）相当くたしてるね。

小川 くたしてる？

麻由子 うん。くたしてる。

小川 どういうことですか。

麻由子 くたす。く・さ・っ・て・るっていうこと。くたさなくてもいいのよ。あの二人、もし私を意識的に無視してたとしても損もないけど得もないでしょ。人がどう見ているかって深読みしすぎて心をくたしている時間もつたいないよ。

小川 ……

麻由子 時間は有限。普通に明日が来るって奇跡みたいなものなんだから。

小川 ……

麻由子 出来ないことにクヨクヨしてても始まらないから、その時できることしっかりやるって考えに切り替えたんだ、私。

小川 ……

麻由子 （軽く匂って）…あ、メイ子ちゃんきたわよ。

山口入ってくる。

山口 おいしかった。(周りを見まわし)あれ、誰もいないんだ。…うーん。

山口、小川と目が合う。が、特に何もない。

小川 榊原先生が、ちょっと待って、って。
山口 そうなんだ。

所在なげにたっている山口。ちよっとイライラし始める。

山口 あー、もう時間ないんだけど。

小川 あの、ちよつとうかがっていいですか？
山口 なに？

麻由子 やめときなつて。

小川 あなたさつき、ご自身の作品が世界中に広まっていくことをめちやくちやいって言われましたよね。地球上に自分の作品がインスタレーションされていくのがうれしいって言ってた。それってあなたにとって、それから世の中にとってどんな意味があるんでしょうか。

榊原、部屋に入ってくるが、中の様子を躊躇し、声が掛けられない。

山口 意味？

小川 たとえば、たとえば、かつてあんなに活躍した後藤さんの存在ですら、今の人にはすっかり忘れられてしまつてゐる。私にとってこれは何よりも悔しいことなんです。

山口
で。

小川
一生懸命作品作ったり、自分の表現を磨いているのになかなか陽の目を浴びない人たちがこの世にはたくさんいます。そんな中にもびつくりするような、目の覚めるような、心揺さぶられるような作品を生み出す人もいます。

山口
ええ、そうね。

小川
私最近こう思ってます。美術・芸術というものは“詠み人知らず”になってこそ世の中の役に立つんじゃないかって。誰その作品だ、時価評価額がいくらだ、なんて主張しているうちはまだ、世のため人のためになっ
ていないんじゃないかって。

山口
それって、なに批判？

小川
数千万、数億円の作品が今ここにあったとして、興味のない人にしてみればさほど価値の感じない、ただの一枚の絵です。それよりだったら、世間に出回っている工業製品とか日用品のように風景になじむこと、消費されていくものの方に価値があるかもしれない。“詠み人知らずのプロダクト”の方が数倍の価値があるかもしれない。

山口
ちよつと何に對していらだつてるのか全然わかんない。あなたの言う“詠み人知らずのプロダクト”は、大量消費の果てのゴミになっていく可能性が高いわよね。あたしたちが生み出してる作品はおいそれとは無駄になんかならないわ。なぜならそれは美術作品としての価値があるから。そもそも美術作品の価値と大量生産の商品を同列に考えるのには無理があるわ。あなたはそれが決定的に理解できていない。単純にそういうことじゃない。冷静を欠いた極論をぶつけられても答えようがない、あたし。

小川
あなたのように大して苦勞もしないでサクサク作品が売れている人間には理解できないでしょうが、悔しいんです。地道に頑張って作品をつくってきた人の存在が忘れられることが。そんな人が忘れられるのに著名な作家の名前を背負った作品だけが世の中から価値を与えられて残っていくことがつらくてやりきれないんです。著名であることと無名であることでどうしてこんなに作家の価値が違ってくるのか…。

麻由子

ちよつと！言い過ぎ！

山口

甘いわ、甘すぎるわ。そんなのこの世界では当たり前のことよ。アマチュアがいればプロもいる。プロの中でも売れる人と売れない人がいる。売れる人は売れるなりの、売れない人は売れないなりの理由があるのよ。あたしは、アートが仕事なの。アートに生きてアートで生計を立ててるの。名前を売っていかなきやなんないの。作品を売っていかなきやなんないの。大量消費の「主張しないもの」のような価値のものじゃダメなの。一個が何万、何十万、何百万のクオリティーの一点ものの作品をつくり続けていかなきやなんないの。それがあたしたちプロフェッショナルの存在意義なの。わかる？ 大量消費の価値の低いものがどんな世の中に溢れてくる方があたしにとっては不安でしかないわ。

榊原、割って入る。

榊原

小川

榊原

地震のあった日のこと昨日のことにように思い出すんですよ、オレ。小川さん…オレも話ししていいですか？ あ、ええ…。

千秋公園のお堀端の芸術劇場のホールに教授とオレとゼミの学生でちょうど舞台制作の演習やってたんですよ。突然、通信端末の地震警報に『遠州灘沖にて地震発生。大きな揺れと津波に警戒』って出た。その後すぐに津波警報が出た。建物の倒壊、津波被害、火災。一緒に汗水流して頑張ってくれた仲間のなかで死んだやつがいます。ホールの名スタッフでした。いい腕をもったヤツでした。寝ても覚めてもホールや舞台への情熱を語っていた男でした。…何物にも代えがたい一人の仲間がこの世からいなくなりました。そんな彼も名もない表現者でした。目に見えるもの、形あるものもいつか滅びるんです。いや、この先100年200年は残るかもしれない。でもこの地球が最後バーンッていけば、何百万何千万何億円のものも木っ端みじんになるんだわ。もしかしたら、明日にでも大津波で一気にかさねられるかもしれない。

人間の営みは儚いものだってわかってるもんで、自分が生きているうちに自分が生きた証を一つでも残したいってがむしろやらに物事に立ち向かって向かって向かいまくることで、表現者はこの世の中に存在できてい

るんだと思うんですよ。

小川・山口
…。

榊原 ごめんね、ちょっと興奮してしまった。…オレね、実はコラボに来るのものがすごく苦手だね。
山口 なんて？

榊原 ここって、とんでもない才能とセンスを持った人がわんさと集まってくる場所だもんでね。美術と格闘しながら自分を高めるための鍛錬を続けている連中がオレにはまぶしすぎてね。
小川 でも先生だってあれだけ素晴らしい作品を生み出せてるじゃないですか。

榊原 どこが素晴らしいですか？ 小川さんとこにあるあの絵のどこにそんな価値があるっていえますか？
山口 バラさん…。

間。

榊原 ごめん、大きな声出しちまって。…先週ここでやってた美大OBの個展見ましたか？

小川 あ、見逃しました。

榊原 彼ね、大学卒業してから秋田の大手のお菓子屋さんで紙媒体の広告やパッケージデザインの仕事してるんです。確かにアートの文脈の中では仕事をしていることになるわけだけど、でもそこには彼の名前が出るわけじゃない。でも、彼はその才能とセンスを仕事にしっかり生かしてる。

…。

小川 二、三ヶ月前、横手でやってたとあるイベントに参加したんです。参加者にサービスで飲み物とちょっとしたお菓子が配られていた。たまたま私の座っている後ろのテーブルが親子連れだったんだが、こんな会話してた。「うわー、このワンコかわいい。あ、パパの方についてるほうがカワイイな、ねえ交換してよ。」って。それはもう絵に描いたような幸せ家族の風景だよ。何の話してるのかなって、ふとその家族見ると、その手元に小袋のお菓子があった。パッケージに秋田犬がデザインされているお菓子。

山口
それって、

榊原
そう。美大OBの彼が勤めてるお菓子屋さんの製品。しかも、彼がパッケージデザイン手掛けたお菓子。彼の

手掛けたパッケージがいままさにこの家族の幸せの真ん中にあるんだよ。それが無性にうれしくて、誇らしく感じてね。涙が止まなくなっちゃった。オレの手元にもそのお菓子があったんだけど、見てもパッケージにはデザイナーの名前なんて一文字も入っちゃいない。たまたまあの会社のデザインは彼がやっていることをオレは知ってたけど、その会場にいる何百人もお客さんはそれを知っている人なんてほとんどいなかったはずだ。…まさしく詠み人知らずの仕事なんだわ。その一方で、企業のリビングのコレクションとして作品のタイトルと作家名が書かれたプレートと一緒に応接室に掛かってなかなか一般の目には触れることのない何十億円のアート作品も存在する。どっちがこの世の中にとって本当の意味で生きたアートなのかなって、考えちゃってね。

山口
どっちもだよ。アートの存在の仕方は一つじゃないから。アートかくあるべし、なんて発想、悲しいじゃない。

榊原
オレもそんなことを学生に教えてるんだけどさ。ときどきそんなことがふと頭をよぎるんだわ。

山口
そんな青臭いこと言ってるうちはまだ現役でやっていけるわ。

榊原・山口
ハハハハハ。

山口
バラさんだって、ステージっていうフィールドですごい作品いっぱい作って来たじゃない。しかも、舞台でがんばっている人の努力が報われるようにって、アートマネージメントの仕事もしてきたじゃない。最上級の縁の下の力持ちだよ。

榊原
ありがとう…。

小川
…知ったような口きいて、申し訳ありませんでした。

榊原
いいのいいの。こっち側のオレたちだって答えだせないことなんだから。ね。

山口
うん。とってもむずかしいこと。

小川
すみませんでした…。

間。

榊原　ところで、今回のアートシンポジウムってどんなことやるの？

山口　過去に活躍した地方在住作家の発掘と作品の検証をするっていうんだけど。

榊原　へえ、なんか面白そうだね。

山口　この細工作った人の仕事、シンポジウムのテーマに選んだんだ。今から50年位前に活動してた作家。

胸元につけていたつまみ細工のブローチを外し、榊原に見せる山口。

山口　これ、震災の直後に日本の生活あきらめてニューヨークに移住した日本人の友達から譲ってもらったの。すごく

繊細で、素敵なものだから、私が気に入るだろうって。その子も東京に住んでる友達から何点か売ってもらったんだってこの作家さんの細工。

榊原　これって…

小川　つまみ細工、ですね。

山口　よく知ってるね。そう。つまみ細工。

榊原　そうかそうかこれがあの作家の…。なるほど丁寧な仕事してるなあ。

山口　手にした瞬間この小さな細工の世界に惹きこまれてね。すぐにこの細工をつくった作家さんのこと調べ始めたの。この細工が渡ってきたルートを遡ったら秋田で制作活動していた作家さんだということが分かったの。

ト、トートバッグの中から資料を出し榊原に手渡す。

榊原　なるほど、つまゆみ、か！　うわ、懐かしい。これ、オレが書いてメイさんに送ったレポートだ！

山口　そう。あの時は本当に助かった。バラさん浜松から秋田に引っ越したっていう話聞いてたから迷わず連絡させ

てもらってね。

榊原 いや、このつまゆみ調査のおかげでオレも秋田のアート界隈の人と仲良くなれたんだよ。オレにとっては山口メイ子さまさま、つまゆみさまさまだよ。

麻由子、手を止めて反応。

榊原 コラボによく来る常連さんに訊くと、秋田でもいろんな人が持つてるっていうんだよね、つまゆみの作品。
山口 うん。

榊原 本名も素性もほとんど謎なんだけど、たくさんの人に作品が愛されてるんだわ。まさにつまゆみって作家はその存在の中に、さつき小川さんとメイさんがそれぞれ言ってた真逆みたいな二つの理屈を、その姿勢と作品の中で無理なく矛盾なくちゃんと共存させられてたんだよ。ホント、あっぱれな作家だわ。

麻由子、軽く照れるも、また手を動かす。

榊原 結局どの程度まで調査できたの？

山口 うん、バラさんが言った通り、すごく作品点数の多い作家さんだったんだけど、秋田や国内だけじゃなく、海外でもいろんな人が彼女の作品を持つてて、普段用とか冠婚葬祭、フォーマルな場面のアクセサリーにして使ってたってということがわかった。そして：どうも若くして亡くなった女性作家さんであることもわかった。亡くなったのって、

小川 亡くなった年だけははっきりしてるの。2025年。橋本さんがたまたま見つけてくれた後藤老人の当時のダイアリーに書いてたの。(資料のメモを読んで)「2月3日。春の日。つまゆみさん亡くなる。雪道を歩いて葬儀場まで行った。たくさん花と一緒に棺の中におさめられた彼女は少し笑ってるような顔で眠っている。彼女がいつも付けていた香水がほんのりかおっている。かおればかおるほど、いろんな思い出がよみがえる。

とにかく涙があふれてくる。つまゆみさんのいちばんの宝物と、そして香水の空箱を形見に分けてもらう。

“

榊原 あ、ここに貼ってあるのその香水の空箱？… “カボティース ローズ”。

山口 (自分の手首を匂って) この香り。

麻由子に目を遣る小川。微笑む麻由子。

山口 不思議だったんだよね。

榊原 なにが？

山口 この秋田で、無名のニックネームみたいな名前の作家の作品がその魅力だけでしかも人づてでアメリカまで届

いたんだよ。すごくない？

榊原 すごいね。奇跡だよ。

山口 後藤老人のダイアリーに書かれてたつまゆみさんの宝物っていうのが何かはわかんなかったんだけど、香水は

今も売られてるから、せめて彼女の香りをまもって見たら何か見えてくるんじゃないかって思って、私ずっ

とこの香水付けてるんだ。カボティース・ローズ。カボティース、 “無邪気な妖精” っていう名前の香水。

榊原 無邪気な妖精、か…

麻由子に目を遣る小川。ほほ笑んでいる麻由子。

麻由子 (かぶり物を指差し) た・か・ら・も・のっ♡

小川 ああ。

麻由子 “つまみ細工” の中に取り込まれちゃった “マユ” だから、 “つまゆみ”。意外と安直な作家名でしょ。ハ

ハハ。

小川 なるほど!!

榊原 はい?

小川 あ、いや、あのそれが、…(ト、ネタをばらそうとする)

麻由子 シーッ。フッフ。

小川 (頷き)なんでもありません。

山口 このコラボラトリーって、つまゆみさんみたいな作家とか、刺激的でとんでもない作家とか、それからものを作る事、表現することを心底楽しんでる人たちにとって昔から最高の居場所だったんだろうね。

榊原 うん。名前やステータスだけじゃなく、最高の居場所をがむしゃらに守ってきた人の思いとか情熱の記憶もオレたちつないでいかなきゃな。

山口 この場所をつくって守って来てくれてありがとう…。

榊原 一日でも長く生きなきゃね。

小川 はい。長く生きなきゃ…。

榊原・山口・小川 ハハハ。…、

間。

榊原と山口の時間が止まっているようだ。

小川 あれ、目が…。

麻由子 どうしたの?

小川 マユさんがちよつとぼやけて見えて。

麻由子 そっか。ね、からだ、大丈夫?

小川 え?

麻由子 だって私のこと見えてたんでしょ。

小川 ええ。

麻由子 死んでる人間見えてるんだもの。…そういうこと。

小川 え…？ ああ、そういうことか…。

麻由子 そういうこと。

小川 …実はドクターからは年が越せるかどうかって言われてて。だからマユさん見た時、マチ、あ、死んだカミさんがいいよ迎えに来てくれたのかと思って。

麻由子 奥さんと似てるの、私？

小川 (ちよっと凝視して)よく見るとあんまり似てませんでした。でも雰囲気がなんとなく。あれ、さつきより目がかすんできた…。

麻由子 ううん、あなたと私の住む世界の距離がちよっと離れてきたんだよ、たぶん。

小川 はい？

麻由子 さつき言ったじゃない、「長く生きなきゃ」って。

小川 はい。

ふたたび榊原と山口の時間が動き出す。

榊原 …小川さん、一つだけ言わせて。さつき、メイさんのこと、大して苦勞もしないでサクサク作品が売れている

人間って言ってたけど、あれ違うよ。彼女、苦勞とかストレスに対する感受性がちよっと鈍い質で、実は相当苦勞してきた人だから。この山口メイ子だってもとは詠み人知らずの一人だったんですよ。傍からは樂觀的に見えるけどね。それは、オレと、それからモリ森尾の二人が保証しますよ。(山口に)ね？

山口
なんでモリ？

榊原 (流して) …でないと世界中飛び回る現代美術作家になんかなれないですって。

山口 …小川さん、ごめんね。あたし、なんか人との距離感の取り方おかしいし、変なスイッチすぐ入っちゃう人間みたいだから。

小川 全然平気です。

山口 だけどさバラさん、私そんなに鈍いかなあ!!

榊原 自分のことだから気づかないのよ、こういうことは。

山口 あ、じゃあバラさんのガサツとおんなじか。

榊原 おいおい、ひでえ言いようだなあ。

一同 ハハハハハ。

榊原 あー、それよりも橋本どうしたよ。どっかで死んでんじゃねーのか？

麻由子 大丈夫、生きてるよ。向かいの駐車場に停めた車の中で雨音聞きながらお昼寝してるから。

小川 (麻由子に) ホント？

麻由子 うん。

迎えに行こうとする小川。麻由子、それを止めて、

麻由子 寝かしといたら。もうじき来ると思うから。

小川 …はい。

榊原 うん、待っててもしょうがねから、みんなで片付けちまうか。

ト、脇の段ボールの中から化学防護服を取り出し小川と山口に手渡す。

山口 着ろ、と。

榊原 うん。着ろ、と。

山口 ペンキを塗れ、と。

榊原 うん。塗れ、と。

一同、笑う。小川と山口、化学防護服を着ながら、

小川 舞台のスタッフさんもこういうの着るんですか？

榊原 いやいや、さすがにそれはないですよ。それぞれ動きやすい格好で作業してます。プラス、仕込みの時はヘルメットと安全靴はマスト。

山口 工事現場じゃん。

榊原 そう、工事現場なのよ舞台の仕込み作業って。危ないんだぜ舞台って。

山口 あんな夢売る場所なのにね。

榊原 そ。

山口 すげー。

小川 公演終わったらあの舞台装置ってどうなるんですか？

榊原 基本、廃棄！

小川・山口 もつたいない！

榊原 かさばるし、保管も大変だし、第一、同じ演目いつやるかなんてわかんないでしょ。舞台は、まっさらにしないと次の作品のセット組めないでしょ。前へ進むためには未練なく全部バラシて廃棄。

小川 なんかエコじゃないしもつたいないなあ。

榊原 そういうことも必要なのよ。

ト、言いながら小川と山口、着用完了。

榊原　じゃあ、詠み人知らずの仕事にかかりますか。

小川・山口　はい。

小川　（山口に）…防護服、意外と似合いますね、山口さん。

山口　はい？　どうして私の名前？

小川　あつ！あの人…いや、あのかぶり物が教えてくれました。

山口　……。ハハハハハ！！まさかあ！…って、また浮いてるう！！

榊原　またかよ、ちゃんと寄せとけよ、ったく。

ト、麻由子の頭からかぶり物をスポンと抜き取って麻由子の膝に乗せる。

麻由子、かぶり物を大事に抱える。

山口　今さらだけど、お名前…、

小川　あつ、小川と言います。小川正隆。

山口　改めまして、山口メイ子。5月生まれだからメイ子。意外と安直な名前でしょ。ハハハ。

小川と麻由子、クスッと笑う。

山口　やる気でてきたあ！！バラさん、塗り終わったらここにサイン入れようか？　白い壁だからサイン映えるよ！！

榊原　それじゃ詠み人知らずの仕事にならないでしょうが。あ、でもサイン入れるのもありだな。ハハハ、明後日からの展示、見ものだぞ。

山口　え？　誰の展示？

榊原　モリ森尾。

山口 森尾おーっ!! ハハハハハ! それでさつき森尾の名前出てたんだ。ウケるーっ! 森尾ごときが秋田で

展示するなんぞ100万年早いわっ!

小川 山口さん、モリ森尾さんとはどういうご関係で?

榊原、「ヤバい!」という表情を浮かべる。
たっぷり溜めて…、

山口 ひ・み・つ。

榊原と小川、固まる。

山口 (乾燥した高笑い)ハハハハハ!!

ト、榊原と小川はゆるゆると、そして山口はやる気満々でハケやローラー、ペンキ缶、ローラーバケットなどを手にする
すると、再び雨の音が強くなる。
麻由子、かぶり物をかぶる。

小川 続きますね、雨。

山口 うん。

小川 ペンキ、乾きますかね。

榊原 大丈夫。乾きますよ、きっと。

山口 “卯の花くたし” かあ。

小川 “卯の花くたし”？

山口 この時期の長雨を指す季語。

榊原 せつかく咲いた卯の花を腐らせてしまう程の長雨っていう意味。

小川 へえ…。

榊原 さ、やっちまいましょう。

一同 うなづく。

そして壁に向かってハケやローラーを構える。

ストップモーション。

麻由子 しとしとしと…しゃばしゃばしゃば…さささささ…。

雨は降り続ける。

唯一、麻由子は動いている。手作業を続けている。